

捕らえられていた
団長ちゃんは無事
脱出することができた

複数の団員さん二緒に：

でも：困となった私は
見せしめとして
拷問を受けた...

私は磔にされ、胎には
下種な男たちの子種に
蹂躪された卵子の
成れの果てが

ゆっくりと
胎動をしている

愛刀の柄が痛々しく
膣にねじ込まれ
ピアスを着けられた
乳首からは時折
母乳が吹き出る

初々しい赤味を
帯びていた膣肉と乳首は
度重なる凌辱の摩擦で
黒ずんでおり

私の「女」がどれほど
壊されたのかを
物語っていた

間章

これは団長ちゃんが
脱出した後、この姿に
なるまでに起きた出来事

私が「孕み散った胡蝶に
なるまでのに起きた」

「記憶の話」

「くそがッ！」

「あぐっ」

「くそがクッが
クッがあっ!!」

「あああ...っ!!!」



「ッやめてええっ!!」

「あがつ!!」

「ああああああつ!!」

そして胸の乳腺や
繊維がダメージを受け
部屋に響き渡る苦悶の声

胸を力任せに
揉んでくる男たち



「あぐっ」

「痛いっ!!」

「ああああつ!!」

「てめえ、ただで済むと思うなよ!」

膣とお尻を
同時に犯し



私は縛り付けられ
何度も拷問のような
行為を受け続けました

「孕みやがれッツ!!」

「あ...がはっ...」

快樂だけではなく
痛みも加わった行為は

これまで魔力を
丹田に込めて
受精を拒んでいた

私の体力と魔力を
あつという間に
削っていったのです

その後も私への行為は続いた

連日昼だろうと夜だろうと...

私はボロボロに
されていった...

丹田の...私の魔力が
もう無く...なる...

そう...

大量の「子種」が
詰まった瓶を

「喜べ、こいつは
アウギユステ中の
男から集めてきた
新鮮なザンサンだ」

「びっ!!!」

「あ...あああ...」

「このついでにめえの子袋の
入口ぶち抜いで
直接流し込んでやる」

「あっ!!!」

「う...あ...あっ!!!」

今日も膈内に
男が子種を
吐き出すと

何かが入った瓶を
別の男が
持ってきました

「へへ...いい物
持ってきたぜ」

「どいつのガキを
孕むか楽しみだなあ!
ヒヤッハッハッ!!」

「イヤアアアアアア!!!」



男たちは
子種の入った瓶を
ねじ込んできた

何本も

敏感になってくる肌に
流れ込んで来る電流が
私の残った魔力を
四散させる

この瞬間…私の子宮は…
完全に無防備になった…

「オラッ
最後の一本だッ!!」

膣に入った瓶を男が
無理やり踏み入れる」

何本も

何本も

「こいつも味わえ!」
捕縛用の電撃棒が
私の体のあちこちに
当てられる

「アッ!」

「だめ…っ!!」

「これ以上は…っ!!」

「こわれ…るうう…っ!!」

「アッアッアッアッ—ッ!!」

浴びせられる電流に
私の膣壁と子宮口は収縮し
子種を迎え入れて
しまうのだった

「アッアッ
ッ!!」

「ユキンッ…」と
股関節がはざれる
音と断末魔のような
叫び声が部屋に鳴り響く

踏み込まれた瓶は
膣内に丸々入ってしまった
先端は子宮口を貫き
子宮壁へと衝突すると
子宮へと子種を
流し込んできた



拷問が始まってから
数時間：

「見てみるよ
マンユガバガバで
子宮口まで見えるぜ」

「それに、デケエ胸も
姿みたいに
伸びちまつてる」

激しい凌辱の爪痕と
降り注ぐ罵りの声

股関節は外れたままに
なっており

男たちの子種に染まった
全身は所々放電しており
痙攣を繰り返していた

真っ赤に晴れ上がった
膣口から瓶が抜かれると

子種が勢いよく
飛び出し地面を
白く染め上げていった

部屋の中央には
無様な胡蝶の姿があった

…翌朝…

「美しく舞い踊るように
相手を切り伏せていた
胡蝶の姿は見る影も
なくなっていた」

「だ…ん…長…ちゃん…」

大切な人の
名前をつぶやき
無事を祈る

— 凌辱は続く —

これはすでに
起きてしまった
事実の振り返り
にすぎない

この後、磔にされた私は
折れた愛刀を
アソクにねじ込まれ
受精したことを知るのだった